

学部・研究科等の研究に関する現況分析結果

学部・研究科等の研究に関する現況分析結果（概要）	1
1. 言語文化学部、国際社会学部、国際日本学部、総合国際学研究科	3
2. アジア・アフリカ言語文化研究所	6

注) 現況分析結果の「優れた点」及び「特色ある点」の記載は、必要最小限の書式等の統一を除き、法人から提出された現況調査表の記載を抽出したものです。

学部・研究科等の研究に関する現況分析結果（概要）

学部・研究科等	研究活動の状況		研究成果の状況	
言語文化学部、国際社会学部、国際日本学部、総合国際学研究科	【4】	特筆すべき高い質にある	【3】	高い質にある
アジア・アフリカ言語文化研究所	【4】	特筆すべき高い質にある	【3】	高い質にある

**1. 言語文化学部、国際社会学部、国際日本学部、
総合国際学研究科**

(分析項目Ⅰ 研究活動の状況 …………… 4)

(分析項目Ⅱ 研究成果の状況 …………… 5)

分析項目Ⅰ 研究活動の状況

〔判定〕 特筆すべき高い質にある

〔判断理由〕

研究活動の基本的な質を実現している。

科研費の採択に向けた支援体制を整備し、過去3か年の採択率が全国平均を上回っている。また、支援結果として、比較的大型の科研費の採択につながっている。特に、若手研究者の申請を積極的に支援しており、令和元年度の採択率は、全国平均を上回る58.3%となっている。また、多数の業績を上げ、学会等から表彰など高い評価を得ている。

〔優れた点〕

- 平成28年度から令和元年度までの4年間で、東京外国語大学の教員が刊行した学術書籍は112点に及ぶ。そのうち、19点が国内外の学会等から表彰を受けている。
- 科学研究費補助金の採択に向けた支援体制を整備し、科研費の過去3か年の採択率はいずれも全国平均を上回っている（平成29年度：50.0%、平成30年度56.0%、令和元年度44.1%）。また、支援結果として、新学術領域研究、基盤研究Aなど比較的大型の科研費の採択につながっている。若手研究者（39歳以下）の科学研究費補助金の申請を積極的に支援しており、令和元年度の採択率は、全国平均を大きく上回る58.3%となっている。

〔特色ある点〕

- 国際日本学研究院では、CAAS（アジア・アフリカ研究教育コンソーシアム）を母体とした、海外の複数の研究機関に所属する外国人研究者で構成される「CAASユニット」、国立国語研究所に所属する研究者で構成される「NINJALユニット」を組織し、国際的共同研究を推進している。南アジア研究センターは人間文化研究機構（NIHU）のネットワーク型基幹研究プロジェクト「南アジア地域研究」に参画している。
- 東京外国語大学における論文等の研究成果の発表の場として、紀要『東京外国語大学論集』のほか、学内4研究所において編集される論集『国際関係論叢』（国際関係研究所）、『語学研究所論集』（語学研究所）、『クアドランテ』（海外事情研究所）、『総合文化研究』（総合文化研究所）等を刊行しており、第3期中期目標・中期計画期間中に計446本の論文を公開している。

分析項目Ⅱ 研究成果の状況

〔判定〕 高い質にある

〔判断理由〕

学術的に卓越している研究業績、社会・経済・文化的に卓越している研究業績が、それぞれ、7件、2件との評価を受けており、現況分析単位の目的・規模等を勘案し、高い質にあると判断した。

特に、「近現代イギリスにおける「人と動物の関係史」を中心とした感情の歴史学の開拓」は、学術的に卓越している研究業績であり、「コーパス言語学に基づく英語到達度指標の開発と多言語展開に関する研究」は、社会・経済・文化的に卓越している研究業績である。

2. アジア・アフリカ言語文化研究所

(分析項目Ⅰ 研究活動の状況 …………… 7)

(分析項目Ⅱ 研究成果の状況 …………… 9)

分析項目Ⅰ 研究活動の状況

〔判定〕 特筆すべき高い質にある

〔判断理由〕

研究活動の基本的な質を実現している。

研究者コミュニティの意向を明確に拠点運営に反映させ、拠点としての機能を適切に遂行しているかを検証するため、外部委員が過半数を占める 10 の委員会を置いている。また、共同利用・共同研究課題については、平成 29 年度に、若手研究者が所員と共同で研究活動を遂行する短期共同研究員制度を共同利用・共同研究課題「短期滞在型」として、また、海外の優れた研究者を招へいし、研究活動を遂行する外国人研究員制度を共同利用・共同研究課題「外国人客員共同研究型」として再編成している。

〔優れた点〕

- アジア・アフリカ言語文化研究所では従来より海外の研究機関に所属する研究者との共同研究を支援するため、外国人研究員を一定期間アジア・アフリカ言語文化研究所に招聘する制度を設けている。第 3 期中期目標期間中に外国人研究員と所員が実施した共同研究は計 12 件（計 8 か国から 12 名を招聘）に及び、関連する国際シンポジウムやセミナー等も数多く行われた。
- 共同利用・共同研究拠点であることを踏まえ、研究者コミュニティの意向を一層明確に拠点運営に反映させ、拠点としての機能を適切に遂行しているかどうかを検証するために、いずれも外部委員が過半数を占める 10 の委員会を置いている。アジア・アフリカ言語文化研究所の研究活動の根幹をなす共同利用・共同研究課題については、すべて公募のうえ共同研究専門委員会が採否の審査を行い、各課題の質の向上につなげている。さらに平成 29 年度には、1) 若手研究者が所員と共同で研究活動を遂行する短期共同研究員制度を共同利用・共同研究課題「短期滞在型」として、2) 海外の優れた研究者をアジア・アフリカ言語文化研究所に招聘し、研究活動を遂行する外国人研究員制度を共同利用・共同研究課題「外国人客員共同研究型」として再編成し、共同研究専門委員会の審査を経るようにしたことで、共同研究活動の質の向上を図っている。
- 第 3 期中期目標期間中には共同利用・共同研究課題 57 件が 3 つの基幹研究とも密接に連携しながら実施され、その結果、令和元年度末現在で、所員及び共同研究員による学術論文 1,817 件、学会発表等 2,197 件と、所員及び共同研究員の研究活動が極めて活発であり、学界に貢献したことが見てとれる。これらの課題に関連した成果として、294 点もの書籍が刊行されていることは注目に値

する。一般向けの書籍も多く含まれており、研究者にとどまらず間違いなく社会の様々なレベルへの波及効果が期待できる。

〔特色ある点〕

- アジア・アフリカ言語文化研究所では独自の出版活動を維持し、共同研究の成果や辞典、基礎語彙集、言語研修テキストを出版してきた。第3期中期目標期間においては電子出版を本格化させ、100点の研究所刊行物のうち、41点が電子出版物として刊行された。成果の国際発信に研究所を挙げて取り組んだ結果、6割を超える62点が外国語を中心とする出版物である。また、共同研究の成果を分かりやすく提示するため、オープンアクセスの一般向け広報誌『フィールドプラス』の巻頭特集も活用している。3つの査読付き学術雑誌『アジア・アフリカ言語文化研究』『アジア・アフリカの言語と言語学』『NUSA: Linguistic studies of languages in and around Indonesia』を刊行し、第3期中期目標期間においては、ほぼ全てを東京外国語大学の機関リポジトリにて公開した。英語での成果発表にも研究所を挙げて取り組んだ結果、第3期中期目標期間中に掲載された120本の論文中、88本は英語論文という結果となった。なお、第3期中期目標期間中のアジア・アフリカ言語文化研究所刊行物のダウンロード数は累計175万件を超えている。
- 情報資源利用研究センターを中心に、国内外の共同研究者と連携し、電子辞典を始めとする言語資料や画像データベースなど、デジタル資源を構築して広く共同利用に提供している。第3期中期目標期間中においては30件のプロジェクト（うち半数は国際共同制作）が進められた。特筆すべき取り組みとしては、①ウェブ上に構築した辞書コンテンツを組版プログラムの開発により書籍版の辞典としても刊行したヒンディー語、カンナダ語、マラヤーラム語、チベット語の各辞典、②画像資料ではIIIF対応コンテンツとして公開した『清文彙書』プロジェクト、また歴史建造物の写真をVRコンテンツとして公開したQALAWN VR Projectが挙げられる。平成28年度の上記コンテンツへのアクセス数は全体で年間40万件であったが、徐々に認知度も高まり、令和元年度では年間427万件へと大幅に伸びた。外国語で発信しているコンテンツは全体の7割に及び、国際的にも広く利用されている。言語資料では海外のアーカイブとの連携もスタートしている。

分析項目Ⅱ 研究成果の状況

〔判定〕 高い質にある

〔判断理由〕

学術的に卓越している研究業績が、3件との評価を受けており、現況分析単位の目的・規模等を勘案し、高い質にあると判断した。

特に、「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制に基づく日本を含むアジアの言語研究」及び「中東・イスラーム圏における分極化とその政治・社会・文化的背景の研究」は、学術的に卓越している研究業績である。